



言葉のない絵本における物語表現の研究

著者	山本 美希
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています
発行年	2016
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2015
報告番号	12102甲第7835号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00144351

{博士論文要約}

言葉のない絵本における物語表現の研究

平成 27 年度

山本美希

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

言葉のない絵本は、数多くの名作のあるジャンルでありながら、これまで分析の対象とされる機会はごく少なかった。その理由のひとつとして、絵本の表現要素である絵と言葉の相互作用によって生み出されるものが絵本独自の表現であると論じられてきたことがある。すなわち、絵本表現の両輪の片方である「言葉」を用いないこれらの絵本は扱いにくい存在であり、その位置づけが曖昧なままにされ、本格的な分析や研究が進められてこなかったと言えよう。一般的な絵本研究の視点からみると、言葉のない絵本には様々な点において特異な性格が見られ、それは絵本の独自性や長所として論じられてきた側面にも少なからず関わっており、こうした絵本を論じる上の障壁となっていると捉えられる。しかし、言葉のない絵本は、今日では多種多様な作品が作られており、その表現について分析・考究する必要性が高まっている。本論文は、言葉のない絵本の表現について、特に物語を内容とする作品を取り上げ分析するものである。ここでは特に現代絵本に含まれる作品、すなわち欧米では 1930 年代以降、日本では 1960 年代後半以降の作品を中心とする。それらの分析を通じて、言葉を用いない表現の仕組みと特徴、およびその意義・意味について明らかにしたい。

本論文は全 9 章で構成しており、第 1 章では研究の目的や方法・対象について述べ、論文の前半部である第 2 章から第 4 章までは、言葉のない絵本を論じる土台を構築するために、これらの絵本を位置づける手掛かりを探る。まず絵本の定義や、通常の絵本の表現を細かに見直してゆく。次いで先行研究を概観し、これまでの研究アプローチについて確認する。先行研究において混在している用語を取り上げて整理し、また言葉のない絵本を捉える上での問題点についても捉え直す。これらの手続きを通じて、言葉のない絵本の位置づけを検討し、これまで曖昧にされてきたこのジャンルの輪郭を描きたい。また、多種多様な作例を内容面から種類分けし、本論文の主題である物語を内容とする絵本を括り出す。以上のように議論の土台を整えたのち、本論文の後半部である第 5 章から第 8 章では具体的に作品を取り上げ、その表現の分析を進める。第 5 章では一部言

葉が抜けるパートが見られる「くまのアーネストおじさん」シリーズ、第6章では言葉のない絵本の代表格である『アンジュール』と『たまご』を取り上げる。この2つの章では、同じ作者による異なるタイプの表現を分析し、その得られた考察から両者の表現の関連についても検討する。第7章では既存の物語を題材とする言葉のない絵本について「赤ずきん」絵本群を例に見てゆく。第8章では、このジャンルの到達点のひとつとも捉えられる作品『アライバル』を取り上げる。それぞれの作品において見られる表現上の工夫について指摘し、物語内容と表現形式の関連についても捉え、言葉を用いない意義・意味を考察する。最後に、第9章において各章の成果を概観し、それぞれの作品に共通して見られる表現の特徴と、こうした表現を採用する意義・意味のポイントについてまとめる。以下、概要を紹介してゆく。

まず、絵本表現における絵と言葉について捉え直したい。「絵と言葉の相互作用」というフレーズだけでは見過ごされてしまいやすいが、絵本表現の絵と言葉の関係は実際には揺れ動いている。その代表的なものは、言葉が物語表現の主体としての役割を果たしていた19世紀までの絵本から、絵を表現の主体として捉える現代絵本への転換である。それに伴い、現代絵本では物語表現の役割の多くは絵が担うようになり、言葉は減少傾向にあると言われている。このように絵と言葉の量・役割が転換し、欧米で現代絵本が成立した時期は1930年前後と考えられている。言葉のない絵本の作例もまた、1930年前後からそれ以降のものが様々な研究者によって報告されており、現代絵本と言葉のない絵本のはじまりの時期は、おおよそ重なる。このことから考えれば、絵を主体として捉える絵本表現の考え方は、言葉のない絵本の成立にも関わっていると捉えられるだろう。

絵本の部分における表現についても注意深く見ると、例えば言葉を用いる通常の絵本とされる作品の中でも、一部のパートでは言葉を用いない表現が見られる場合がある。それらのパートは物語内容と密接に関連し、絵だけで物語を示す役割を果たしている。現代絵本の父と称されるランドルフ・コールデコットの絵本にも、絵だけが表す物語内容があり、言葉のない画面が頻出する。すなわち、絵本の部分においても場面に応じて、絵と言葉の量・役割の強弱には揺れ動きがあることがわかる。さらに、ほとんど言葉のない絵本と呼ばれる、言葉がごく僅かに用いられる作品群もあり、こうした絵本は特に絵に役割が大きく偏ったものとして捉えられる。このように通常の絵本でも、絵と言葉の役割の比重に偏りが見られることがあり、内容に応じてどちらか片方だけに役割が与えられることも珍しくない。一般的な絵本においても絵と言葉のバランスの強弱は揺れ動いており、こうした表現は、絵のみが表現要素となる「言葉のない絵本」に結びついていると捉えられる。本論文において、言葉のない絵本は通常の絵本表現の延長線上に

あり、物語内容を表現する役割が全て絵に偏って託されているものと位置づけられる。一部言葉を外す絵本やほとんど言葉のない絵本は、通常の絵本と言葉のない絵本の間のグラデーションを織りなす存在と言えよう。

第5～8章では具体的な作品について、内在的な表現の分析を進めた。第5章では、ベルギーの絵本作家であるガブリエル・バンサンの手がけた「アーネスト」シリーズを取り上げた。シリーズ中には、言葉のあるパートとないパートを併用した絵本が多く含まれ、それらは言葉を用いない表現を一部含む絵本の代表として捉えられる。言葉のないパートが沈黙や間を表す場合、それらは登場人物の心情を示す役割を果たしていた。また、主要な登場人物が赤ん坊で言葉を話すことができない場合にも、言葉のないパートが多く見られる。すなわち、こうした表現はそれぞれの物語内容に即して活用されており、それに応じた役割を担っていることを明らかにした。言葉を用いない表現は、豊かな絵本表現を実現するために役割を担っており、このことは「アーネスト」シリーズに限らず、通常の絵本の中で言葉を避けたパートが見られる絵本の全体に共通するものであると考える。

第6章で分析の対象としたのは、前章で取り上げたガブリエル・バンサンによる、言葉のない絵本の代表格とも言われる『アンジュール』と『たまご』である。両者の様々な表現上の工夫を比較しながら、共通点と対照性を明らかにし、セットとしての性格について論じた。さらに、この両作品において言葉を用いない理由について、言葉を持たない動物を描いたものであること、自由な解釈を求めていること、ユニークな芸術表現への挑戦であることなどを指摘した。また、第5章と第6章で得られた考察から、バンサン作品にはできる限り言葉に依存しない表現への指向が見られ、通常の絵本も言葉のない絵本もその姿勢に貫かれていることを指摘した。両者は同様の方向性を実現するための表現であり、絵と言葉のバランスの強弱の現れ方が異なるものだと捉えられる。

第7章では、また別のタイプとして、既存の物語を題材とする言葉のない絵本について考えた。このタイプの代表として、「赤ずきん」を題材とする絵本群を取り上げ、分析を進めた。既存のテキストの中から、言葉なしでは表現するのが難しいと思われる場面に注目し、それらを解決する各作品の様々な表現の工夫について指摘した。また、既存の物語を題材としている理由について、読者の知識を活用できることによりコンテンツを表現するための負担が少なくなること、それにより前衛的な表現や独自の解釈を持ち込むなどの新鮮な表現が可能になることを考察した。

第8章で最後に作品分析の対象としたのは、『アライバル』である。これは言葉を用いない絵本表現の総合的達成であるとも思われる傑作である。画面のサイズや配置、モノトーンの色調の繊細な操作、古書のような装丁など、細部に至るまで徹底して見られ

る表現上の工夫について指摘した。この作品では、主人公が移住先で言語の壁に直面することが、言葉を用いない表現を採用していることと密接に関連している。作者自身が創作した架空の文字を提示することで、主人公と読者は共通の問題に直面する。主人公が作中で絵を描くことによって周囲の理解を得る行為は、作者が絵だけで読者に物語を伝えようとする姿勢と重なり合う。読者と主人公は言語の問題を共有し、作者と主人公は絵によってその解決を試みる。こうした構図によって、絵だけで全ての物語を表現する必然性が生まれている。言葉を用いない表現は、物語内容との関連から呼び起こされた必然性があると同時に、新しい表現へのチャレンジでもあり、また言語を共有しない人々へ物語を伝達するための試みとしても捉えられる。

本研究で取り上げたそれぞれの作品分析について全体を眺めてみると、共通する性格が浮かび上がる。言葉のない絵本に通底する特徴的な表現上の課題が見られ、また分析によって明らかになった各作品の言葉を用いない意義・意味にも似通った傾向がある。第9章ではこれまでの論を整理し、その成果をもとに言葉のない絵本の表現の仕組みと、こうした絵本を制作する意義・意味について考察した。

本論文での検討全体を通じて見えてきたことは、言葉のない絵本には、このジャンル共通の課題の解決、読者の知識・判断を前提とした表現、絵の特性を生かす表現などの特徴的な傾向が見られるということである。また、こうした表現の意義・意味は、言葉を持たない存在・言葉を奪われた状況を強調して表現すること、暗示的・象徴的表現の追求、読者に意味づけを委ねて多様な解釈を引き出すこと、さらに作者にとって新しい表現を追求する一種のチャレンジであるというところに見いだせる。この意義・意味は、一般的な絵本においても共通する場合があるが、先に述べたように言葉を用いない表現は通常の絵本表現の延長線上にあり、両者は同様の意義・意味を共有しながらそれぞれの表現の様相によって偏りを生み、一部分の意義・意味を前景化する。本論文において見いだした言葉を用いない表現の意義・意味は、言葉のない絵本独自のものと言うよりも、作品の特定の側面を強調するものである。言葉を用いないというある種の特殊な表現を採用することで、物語内容に応じた必然性や暗示的・象徴的表現、解釈の多様性、表現上のチャレンジ等が含まれていることが強調され、作品の方向性が明確に示されると見ることができるだろう。

このジャンルには多種多様な作品があるため、全てにこれらの仕組みが用いられ、同様の傾向が見られるとは言えない。本論文では、言葉を用いない表現の意義はそれぞれの物語内容と関わっており、一概には扱えないという立場から各々の作品を分析してきたのであり、作品の数だけその意義も存在すると考えられる。この表現についてより詳しく論じるためには、今回取り上げられなかった数多くの作品についても、同様に検討

する必要がある。しかし、ここで取り上げた作品の分析を通じて、言葉のない絵本における物語表現の特徴とこの表現を用いることの意義・意味について、幾つかの代表的なポイントを明らかにできたものとする。